

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月20日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520671

研究課題名（和文） 治承・寿永内乱前後の荘園制の変貌にかんする研究

研究課題名（英文） Research on change of the manor system after passing through the civil war which happened at the first half of the 1180s

研究代表者

高橋 昌明（TAKAHASHI MASAOKI）

神戸大学・大学院人文学研究科・名誉教授

研究者番号：30106760

研究成果の概要（和文）：1180～1185年にわたって日本全国を大混乱に陥れた内乱は、院政期に蓄積された社会矛盾の発現の結果という一面があり、その終息過程で、荘園制は地方社会への負担を軽減する方向で、制度の整備がなされていったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The Japan whole country faced the big civil war from 1180 to 1185. Before the civil war occurred, the aristocrats of Kyoto had burdened locality society with heavy land tax. The civil war had the element that local people's dissatisfaction to it exploded. The institutional improvement of the manor system which aimed at reducing the land tax with which locality society is burdened was made after the end of a civil war.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史

1. 研究開始当初の背景

(1), 12世紀80年代前半に展開された治承・寿永の内乱の政治（戦争）過程にかんする研究はすでに一定の蓄積をみており、内乱を発生せしめた社会的な背景についても、さまざまな言及がなされていた。

(2), しかし、内乱がなぜ一挙に全国化し、

また長期の内乱の渦中および戦後の日本社会に、どのような悲惨な状況が生じたのか、さらに内乱が社会の基本骨格、とくに荘園制や国衙領の支配体制にどのような打撃を与え、いかなる構造変化をおこさせたかといった点からの、目的意識的な研究は決して多いとはいえなかった。

2. 研究の目的

(1), 治承・寿永の内乱は、単なる源平両勢力間の戦争にとどまらず、日本社会に極めて大きな影響をあたえた。内乱の全国化は鳥羽院政期以降の荘園制の急激な増大とその内部矛盾によることが多いと考えられる。また内乱は戦争の過程を通して荘園制自体にも深甚な打撃を与え、再編成を迫ったと見られる。

(2), 内乱がなぜ一挙に全国化し、また長期の内乱の渦中および戦後の日本社会に、どのような悲惨な状況が生じたのか、さらに内乱が社会の基本骨格、とくに荘園制や国衙領の支配体制にどのような打撃を与え、いかなる構造変化をおこさせたかを考えるのが本研究の目的である。

(3), これらの過程の意味を具体的に明らかにすることを通して、内乱の原因・実相・結果を正確に把握したいと考えた。

3. 研究の方法

(1), 越後国白河荘、備後国大田荘、南九州の島津荘といった在地領主を介在させた大型の荘園について、既成の研究を踏まえつつも、改めて実地の踏査をすすめ、領域、居館、耕地状態、水利などについての知見を深めた。このように地域を違えて調査をしたのは、荘園の地域差を考慮したためであるが、さまざまなタイプの荘園を扱うことによって、複眼的な視点での探求を深めたいという意図があった。

(2), 研究の全期間において、近年の荘園制研究の成果を吸収し、それを継承発展させる努力を行った。とくに川端新『荘園成立史の研究』(思文閣出版、2000)、佐藤泰弘『日本中世の黎明』(京都大学出版会、2001)、高橋一樹『中世荘園制と鎌倉幕府』(塙書房、2004)などは必読文献で、これらとの真摯な学問的対話なしには、何事もはじまらないことを強く認識していた。

(3), その結果を神戸・佐倉それぞれで開催した研究会で報告しあった。前記佐藤泰弘・高橋一樹両氏が研究分担者に加わったので、有効な議論を重ねることができた。

(4), 日常的に研究会に参加した正木有美氏(もと三田市史編纂専門員)には基礎史料の整理と在地領主を介在させない荘園の形成や構造について考えてもらった。

4. 研究成果

(1), 研究課題を実現するため、治承・寿永内乱期の都鄙の悲惨な状況を『方丈記』の正確な読みを通して明らかにしようとした。その成果については、岩波書店発行の『文学』「方丈記八〇〇年特集号」に掲載することができた。以下内容を簡単に紹介する。

①、鴨長明は序で、無常の世における人と栖のはかなさを述べ、ついで例示として、20歳代後半に体験した五大災厄について書いている。

②、いずれも大きな災厄であるが、治承4年(1180)の福原遷都以外の四大災厄は、長明の意識のうちでは、人力を超越した自然災害として把握されている。四大とは、インド思想における宇宙や自然の構成原理として想定された四つの粗大な実在の意味で、物質界・生物界を構成する共通の要素たる地・水・火・風の四元素のこと。

③、これらの考えによれば、安元3年(1177)の大火は火、治承4年の辻風(竜巻)は風、養和年間(1181~82)飢饉は水にあたる。大火と辻風はわかりやすいが、養和の飢饉が水にあたるのは、その主要な原因が生命の源である水の乏少(日照り)、あるいは過剰(洪水)の結果とみなしているからである。

④、長明が自然災害とみなしたなかでも、養和の飢饉を主に、関連して元暦2年(1185)の大地震について、その実際と長明の認識の水準・特徴を明らかにした。

⑤、鴨長明は、大飢饉を簡にして要をえた筆で迫真に描いている。今回その悲惨な状況について、『吉記』や『玉葉』『養和二年記』などの貴族の日記によって跡づけるとともに、越後国白河荘の内乱期の作田数の顕著な減少ぶりや醍醐寺・仁和寺転輪院の困窮状態などを通して、一層具体的に明らかにできた。

⑥、長明はすでに指摘されているように、飢饉が内乱・戦乱にともなう社会混乱を主な原因とする人災であることを、認めようとしていない。②で述べたように、宇宙や自然の構成原理である四大種による四変という枠組み内に整序しようとする意識の働きである。

⑦、彼は賀茂御祖社の禰宜鴨長継の次男として生まれ、7歳で従五位下となるなど、恵まれた幼少期を過ごしたが、有力な保護者である父の死や妻子とのあかぬ別れ、下鴨河合社の禰宜職をえられなかったことなど、人生い

くつかの挫折を体験して出家遁世した。政治や戦争という敵味方を峻別してやまない不寛容で人を獣畜化する領域を嫌い、観念のうちから意識的に閉め出したからである。

⑧、むろん彼も都の人びとの窮状が、内乱によって荘園公領制が正常に作動しなくなったのが原因だということを実^{オニワサ}事実上認めている。「京ノナラヒ、何事ニツケテモ、ミナ、モトハ田舎ヲコソ頼メルニ、絶ヘテ上ルモノナケレバ、サノミヤハ操モ作リアヘン」というくだりは、まさにそれを示している。

(2)、また備後国大田荘において内乱前後の荘園制の変貌について具体的な答えを出すことをめざした。同荘にかんする研究は数多いが、後白河法皇が高野山根本大塔領として同荘を寄進した前後の時期の解明は十分ではなかった。今回は、その目的、さらには荘園支配が内乱の痛手を乗り越えて軌道に乗るまでの時期について論じ、論文として一応の成稿をみた。しかし、なお分析の深化、推敲の必要があり発表にいたっていない。以下その内容を要約する。

①、寿永2年(1183)高野の勸進聖鏝阿が、後白河法皇に働きかけ、播磨国福井荘が寄進され、根本大塔での両界曼荼羅法勤修の用途に宛てられることになった事実を述べ、両界曼荼羅法とは何か、それに用いられた高雄曼荼羅とは何か、その後高雄曼荼羅と福井荘の双方が文覚の強引な要求によって、神護寺に奪われてしまった事実を述べた。

②、文治2年(1186)、鏝阿の再度の働きかけにより、後白河が備後国大田荘を根本大塔に寄進したことを述べ、鏝阿が両界曼荼羅法を実施せんとしたのは治承・寿永内乱の戦没者の供養が目的で、平家の怨霊を恐れる後白河はそれに応える必然性があったこと、鏝阿個人にとって両界曼荼羅がもっていた意味についても述べた。

③、次に、なぜ勤修の場が根本大塔なのかという点を解明した。結論としてそれを再建したのが平清盛で、使われた両界曼荼羅も清盛が制作した血曼荼羅の可能性が極めて強く、また備後国大田荘が平家旧領であり、これらが相乗して平家の怨霊を鎮撫する、という後白河の心理にかなっていたことを述べた。

④、内乱期に下司らによって押領されてしまった大田荘の再建を主導したのは鏝阿その人であったが、検校以下の供僧は、強硬路線

をとって却って荘園経営を困難にした。鏝阿は在地勢力に一定の譲歩をすることで、再建を軌道に乗せたことを明らかにした。

⑤、鏝阿が当時金剛峯寺を支配していた門閥支配を荘園管理のレベルで抑制しようと思図したこと、それが結果として鎌倉期的な荘園領主制を創出するものであったことを指摘し、内乱を挟んだ平安と鎌倉の荘園支配の違いを論ずる材料になることを述べた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 高橋昌明、養和の飢饉、元暦の地震と鴨長明、文学(岩波書店)、査読無、13巻2号、2012、48—60
- ② 高橋昌明、宋銭の流通と平家の対応について、アジア遊学(勉誠出版)、査読無、132号、2010、70—79
- ③ 高橋昌明、平家都落ちの諸相、文化史学、査読無、65号、2009、45—67
- ④ 高橋昌明、六波羅幕府という提起は不適當か—上横手雅敬氏の拙著評に答える—、日本史研究、査読有、563号、2009、27—39

[学会発表] (計3件)

- ① TAKAHASHI Masaaki, Fictions and Facts of the Heike Monogatari. (keynote speech), International Conference / Loveable Losers: The Taira in Action and Memory, 2011.8.13, Banff Centre (Canada)
- ② 高橋昌明、平家の西八条亭とその後、日本史研究会七月例会、2010.7.17、京大会館(京都市)
- ③ 佐藤泰弘、回帰する荘園研究—鎌倉佐保『日本中世荘園制成立史論』一、日本史研究会中世史部会、2009.12.8、日本史研究会会議室(京都市)

[図書] (計5件)

- ① 高橋一樹、他、高志書院、中世人のたからもの—蔵があらわす権力と富、2011、37—54
- ② 高橋一樹、他、高志書院、兵たちの時代第1巻、2010、126—151

③ 高橋昌明，他、吉川弘文館、日本の対外
関係第3巻、2010、165—188

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 昌明 (TAKAHASHI MASAOKI)
神戸大学・大学院人文学研究科・名誉教授
研究者番号：30106760

(2) 研究分担者

佐藤 泰弘 (SATO YASUHIRO)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：30289011

高橋 一樹 (TAKAHASHI KAZUKI)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：80300680

(3) 連携研究者